

書道初特選 富岡さん

土佐塾高校前校長

学校の廊下 生徒と猛稽古

僕のアトリエは学校の廊下です——。第70回県展の書道で初特選になった富岡豊英さん(62)＝高知市横浜新町3丁目＝は、土佐塾高校(同市北中山)の前校長。18年前に高校1年生に交じって、一生徒として受けた書道の授業が、墨の世界に踏み出すきっかけになった。県展は過去14回出品し入選10回、入賞ゼロ。壁を突き破れずがっかり落ち込むたび、生徒たちに慰められてきたという。ようやくの初特選は生徒たちに祝福され「不器用でもコツコツやればえいことあるぜよ」と顔をほころばせている。

(天野弘幹)



富岡さんは古典教師として教壇に立ち、和歌や漢詩など書に近い分野を専門としてきた。自分で筆を持つことはなかったが、40代でふと思いつき、同高で教えていた県展無鑑査の書家、浜田尚川さんに頼み、授業を受けるようになった。

授業は週に2時間ずつ。書き上げるたび、浜田さんの添削を待つ生徒たちの列に並ぶ。「もちろん割り込み禁止。僕を見て生徒が『先生、もうちょっと勉強したらどうです』とお願いする。『うん、そらも注目してくれ』と言っただけで、いつも入選止まり…。落ち込んでいたら、『先生、そんなに自分を追い込んでいいか』と生徒に言われて、『うん、そらも注目してくれ』と言っただけで、いつも入選止まり…。落ち込んでいたら、『先生、そんなに自分を追い込んでいいか』と生徒に言われて、『うん、そらも注目してくれ』と

「生徒たちと一緒に書を学ぶことで、僕の中で教育に対する考えが変わったんです。以前はよく、上から目線で『何でこんなことができるのか』と生徒たちに思ったものでし

万年入選 もがいた十数年



書道部員たちに見守られ、筆を手にする富岡豊英さん。特選作品も廊下で書いた(高知市の土佐塾中高)

た。でも書をやり始めたら『言われていることとは分かるけど、筆がうまく運べない』ことがあるのだと身に染みだ。自分と生徒が同じ位置にいることを実感したんです」と話す。

09年から中学、高校の校長を歴任。今春退いて同校の図書館長となり、同時に書道部副顧問に戻った。古典の教壇にも立ち、放課後の廊下で生徒たちと筆を振るう日々は、充実している。